

剣道の指導法に関する研究

初心者を中心とした剣道授業内容の理解についての実態調査

前阪 茂樹*

Research about an instruction law of kendo

Fact-finding about understanding of kendo lesson contents that considers
research beginners about an instruction law of kendo as the core

Shigeki MAESAKA*

Abstract

NIFS is the only national athletic college in Japan. Students belongs to each special course and attends a lecture (theoretically, practice experimentally, exercise are such as). As a position of an athletic practical skill at this college and including an aforementioned reason also, all students must do a study acquisition for practical skills of a major (own special item) relation (so-called generally athletic item). Though I enforced it 30 times through establishment 3 terms in those days current lesson, 20-time shortening by an educational course alteration in 1992 for 2 terms it was done. The content, is selected carefully and is a fact also that it changed the figure by a progressive degree by these alterations for the lesson that was advanced as having a comparative time until that time.

It is done by a method of "kihon (a foundation)" and "kata" attaching importance to formerly also now about an instruction of kendo. With the reason of it needing time, it cans wonder whether it is difficult lesson to students of beginners with no being equal to becoming it as the true pleasure of kendo understands it, can feel actually then. With these, I thought that I would like to enforce a questionnaire survey that is about an understanding extent for lesson of kendo of current students. For an understanding extent that a beginner is about a content of a durability kendo by this, we can know it he considers it as a purpose to do a creativity again for a future lesson content then.

The main results are as following :

For the study persons of this lesson in experienced persons 34 (39.1%) and inexperienced persons 53 (60.9%).

It was "sahou · reihou (manners courtesy law)" that it is the highest at every understanding to be about kendo of study persons of the whole, and it was "kirikaeshi" that it is the lowest.

Were a difference thought a group of experienced persons with a group of inexperienced persons for understanding the contents of kendo.

* 鹿屋体育大学 武道講座 Budo, National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan.

However, a valid difference wasn't thought them in both groups with an item about respiration of "kendo-gata (kata)".

KEY WORDS: *understanding the contents of kendo, kirikaeshi, kendo-gata, respiration*

I. はじめに

本学は国立唯一の体育の単科大学¹⁾であり、学生はそれぞれの専門課程に所属し、講義(理論, 実習, 実験, 演習等)を受講している。本学における体育実技の位置づけは上述の事由も含め、すべての学生が専修(自分の専門種目)・関連(いわゆる一般体育的な種目)の実技を履修・習得しなければならない。現在の授業区分、関連B(Bは実技)において合志の指摘にもあるように創設当時3学期を通し30回の授業が、平成4年度の教育課程改訂によって2学期20回に短縮され²⁾、それまで比較的余裕を持って進められてきた授業がこの改訂によってその内容が精選され、進行度合いによって変容してきたのも事実である。しかも改訂前では関連Bを基礎実技I・IIとして専門外の実技でも2年間の履修ができた。

剣道について「剣道形」や「基本動作」の修練には、その根底に運動技術の習熟の完全性ないし、理想を追求し、先哲万師が構築した「わざ」・「かた(型)」を繰り返しておこなうことで自らを内省し鍛えるという意味合いがある。したがって、実技指導に関しては今も昔も「基本」や「型」重視の指導方法によっておこなわれている。そして剣道の真の醍醐味が理解・実感できるようになるには相当な時間を要することから、初心者のかかも専門外の学生にとっては「難解な」実技ではないかと考えられる。これらのことから、現在の学生の自分の専門はもとより、それ以外の実技に対する理解度に疑問を持ち、関連B剣道実技の授業についてのアンケート調査を実施したいと考えた。これによって初心の段階の学剣者(この場合は履修学生)がもつ剣道の内容についての理解度を知ること、及び今後の授業内容を再度工夫することを目的とする。

II. 授業計画の立案に対する考え方とその実施

表1 平成10年度における関連B剣道の授業計画

回	期日	授 業 内 容
1	4/17	オリエンテーション、剣道着・袴の着装
2	4/24	作法・礼法・竹刀の扱い方・構え・体捌き(足捌き)・素振りI
3	5/1	素振りII(上下振り・斜め振り・正面素振り・跳躍素振り)
4	5/8	単独動作による基本打突I(面・小手・胴打ち及び突き)
5	5/15	単独動作による基本打突II(連続技の展開)
6	5/22	相対動作による基本打突Iとその受け方
7	5/29	休講
8	6/5	相対動作による基本打突IIとその受け方
9	6/12	切り返し
10	6/19	1学期の評価
11	9/4	剣道具を着具しての切り返し
12	9/11	しかけ技
13	9/18	応じ技
14	9/25	稽古I(約束稽古)
15	10/2	稽古II(打ち込み稽古・かかり稽古)
16	10/9	稽古III(互格稽古)
17	10/16	日本剣道形(1~3本目)
18	10/23	日本剣道形(1~3本目)
19	10/30	日本剣道形(1~3本目)
20	11/6	日本剣道形(1~3本目)
21	11/13	総合評価

回	期日	授 業 内 容
1	9/7	オリエンテーション、剣道着・袴の着装、作法・礼法・竹刀の扱い方・構え・体捌き(足捌き)、素振りI
2	9/14	素振りII(上下振り・斜め振り・正面素振り・跳躍素振り)、単独動作による基本打突I(面・小手・胴打ち及び突き)・II(連続技の展開)
3	9/21	相対動作による基本打突Iとその受け方 相対動作による基本打突IIとその受け方
4	9/28	切り返し
5	10/5	剣道具を着具しての切り返し
6	10/12	稽古I(約束稽古)、しかけ技と応じ技
7	10/19	稽古II(打ち込み稽古・かかり稽古)、稽古III(互格稽古)
8	10/26	日本剣道形(1~3本目)
9	11/2	日本剣道形(1~3本目)
10	11/9	総合評価

平成10年度の関連B剣道実技の授業計画は、表1に示した。この授業計画は日本古来の伝統的武技であり、民族の文化遺産である剣道の修練を礼法・心法・技法を基盤とした伝統的修練形式を踏襲しながら剣道の基本技能の修得と礼法の実践を目標としたものであり、公表されている計画内容³⁾に添い、それをさらに精選して剣道の基本(礼法、基本動作、切り返し、約束稽古、剣道形)中心の内容にした。各単元(授業内容)についての説明や留意点等の指導については、高野佐三郎著「剣道」⁴⁾、全日本剣道連盟「幼少年剣道指導要領」⁵⁾、「全解日本剣道形」⁶⁾、全剣連講習会資料⁷⁾を授業中の作法・技術解説等の参考資料として用いた。そして授業実施に関しては、第1回目にオリエンテーションの時間を設け、資料(表1)を配布して計画の流れを理解させた上でおこない、当初の予定通りに実施した。

この授業計画の特徴は、上記の基本中心の中でも「切り返し」に重点を置き、指導したことである。切り返しは剣道修練上最も大切な稽古法の一つであり、筆者も「現代剣道における切り返しの位置づけは基本的動作の総合稽古法である」⁸⁾との知見を得ていることから、竹刀での剣道の「型」を意識させながら指導し、約束稽古、互格稽古のおわり毎にも必ず実施させるようにした。

Ⅲ. 研究方法

1. 調査期日

アンケート項目は先の1次資料を基に授業中に用いた用語・表現を用いて作成し、最終の授業にあたる補講期間中(1998年11月9日及び11月13日)に実施した。

2. 調査対象

本学武道館2階剣道場に於いて、平成10年度における本学の実技の授業、関連B剣道を受講している学生112名に対し、同意を得た上で質問紙によるアンケート調査をおこなった。なお、有効回答人数はそのうち87名(回収率77.7%)であった。

3. 調査内容

本研究の調査内容は、サンプルの(個人的)属性、剣道経験の有無、級及び段位、授業内容の理解・達成度である。質問項目(授業内容)は65項目で、作法・礼法(4項目)、基本動作(11項目)、打突(13項目)、切り返し(8項目)、約束稽古(4項目)、互格稽古(4項目)、剣道形(21項目)のカテゴリーに分け、それぞれの内容の理解・達成度を1.“できるようになった”2.“自信はないができていると思う”3.“できて自信がない”4.“できない”の4つの尺度により回答を求めた。

4. 分析方法

分析には統計パッケージSPSS 6.1 J Base Systemを用いた。

収集したデータは項目別に単純集計をおこなった。また4尺度についてはそのまま点数化して平均値及び標準偏差値(Mean±SD)を求め、どの質問項目(授業内容)について理解しづらいのか全体の傾向を出した。さらに各項目に関連すると思われるものに関して「剣道経験の有無」についての項目とのクロス集計を施し、Pearsonの χ^2 検定によって独立性の検定をおこない、考察した。

Ⅳ. 結果・考察

1. サンプルの属性

表2は本研究で調査したサンプルの属性をまとめたものである。性別で見ると男性65名(74.7%)、女性22名(25.3%)であった。学年別では1年生が87名中78名(89.7%)とそのほとんどを占める。課程別では体育・スポーツ課程が51名(58.6%)、武道課程36名(41.4%)であった。専門種目については本学の実技の専修コースに添って分類した。陸上10名(11.5%)、体操3名(3.4%)、水泳5名(5.7%)、バレーボール5名(5.7%)、バスケットボール5名(5.7%)、サッカー6名(6.9%)、ラグビー4名(4.6%)、海洋スポーツ10名(11.5%)、柔道8名(9.2%)、剣道27名(31%)、その他4名(4.6%)であった。

剣道経験の有無については「経験者」34名(39.1%)、「未経験者(初心者)」53名(60.9%)であった。

表2 サンプルの属性 (n=87)

	度数(人)	%
〈性別〉		
男性	65	74.7
女性	22	25.3
〈学年〉		
1年	78	89.7
2年	1	1.1
4年	7	8.0
6年	1	1.1
〈課程〉		
体育・スポーツ	51	58.6
武道	36	41.4
〈専門種目〉		
陸上	10	11.5
体操	3	3.4
水泳	5	5.7
バレーボール	5	5.7
バスケットボール	5	5.7
サッカー	6	6.9
ラグビー	4	4.6
海洋スポーツ	10	11.5
柔道	8	9.2
剣道	27	31
その他	4	4.6
〈剣道経験の有無〉		
ある	34	39.1
ない	53	60.9
〈段位〉		
初段	3	3.4
二段	4	4.6
三段	24	27.6
なし	56	64.4
〈経験年数〉		
0年(なし)	54	62.1
2年	1	1.1
3年	3	3.4
4年	2	2.3
6年	1	1.1
7年	2	2.3
9年	2	2.3
10年	2	2.3
11年	8	9.2
12年	7	8.0
13年	5	5.7

次に段位については経験者34名中、有段者が31名(35.6%)であり、剣道専門の学生(27名)を除く7名が経験者であり、内4名は有段者(初及び二段)であった。剣道経験年数は、経験なし(0年)54名(62.1%)、2年1名(1.1%)、3年3名(3.4%)、4年2名(2.3%)、6年1名(1.1%)、7年2名(2.3%)、9年2名(2.3%)、10年2名(2.3%)、11

年8名(9.2%)、12年7名(8%)、「経験あり」では11年8名(9.2%)が最も多く、次いで12年7名(8%)、そして最長が13年で5名(5.7%)であった。

2. カテゴリー別にみた剣道の授業内容についての理解・達成度

授業中に説明した剣道の学習内容について、どれ程理解し達成出来たかをまとめたものを表3に示した。4尺度における理解・達成の目安は、剣道経験者と未経験者、剣道専攻学生と多種目専攻学生や段位によっても理解・達成の度合そのもののレベルに大きな差があるのではないかと考えられるが、ここでは個人の自己評価として1.“できるようになった”(1点)2.“自信はないができていていると思う”(2点)3.“できている自信がない”(3点)4.“できない”(4点)と定義した。点数化した尺度の全体の平均値 Mean±SD は1.8±0.74であった。この結果は実際に指導した見地から、「達成度としては自信がないが、理解はしている」というレベルのものであると考えられる。

1) 作法・礼法

作法・礼法についての理解・達成度の Mean±SD は1.36±0.58であり、全員がほぼ理解できていると考えるが、「剣道具の着具(1.37±0.59)」については実際の授業では1人で素早く着具できない者が未経験者の中で目についた。

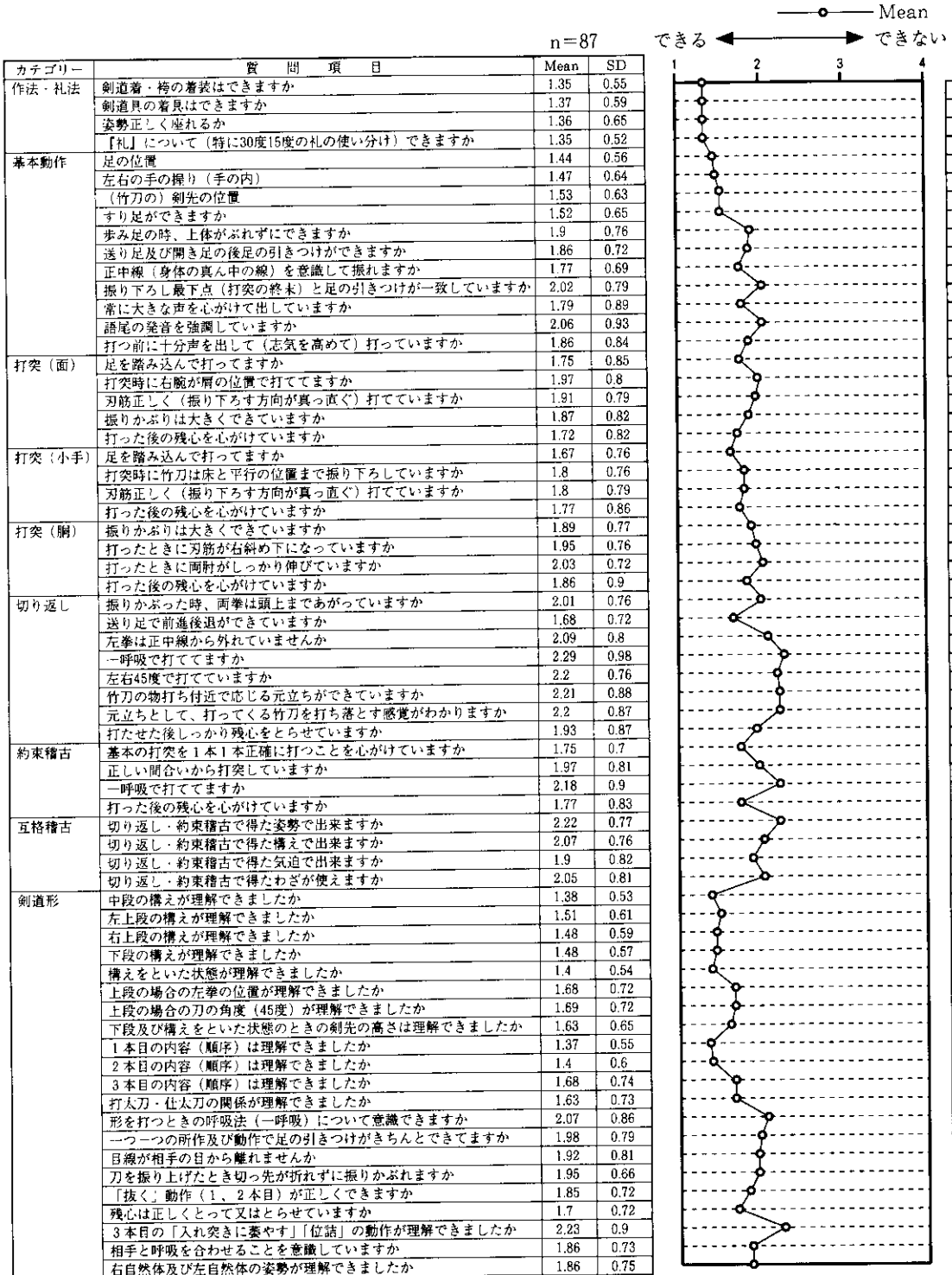
2) 基本動作

基本動作についての理解・達成度の Mean±SD は1.75±0.74であった。このカテゴリーで最も平均が高かった(理解・達成度が低い)のが「発声における語尾の強調(2.06±0.93)」で、次に「素振りのときの振りおろしと(後)足の引きつけ(2.02±0.79)」であった。これは打突における気(発声)・剣(振り)・体(足の引きつけ)の一致は難しいことであると示唆している。

3) 打突

基本打突として(正)面、小手、(右)胴打ちについての理解・達成度の Mean±SD は1.85±0.8であった。ここでは胴打ちの「両肘をのばし

表3 カテゴリー別にみた授業内容（質問項目）についての理解・達成度
 （理解・達成度は4段階の尺度に分け、そのまま点数化して1点に近いほど理解・達成度が高いとする。）



て胸を打つ (2.03 ± 0.72)」について理解・達成度が最も低かった。剣道では一般に面打ちが技の中の基本でありまた最も難しいといわれるが、初心者の段階において、「手の内の冴え」が充分でないために胸打ちの難しさが示唆されたと考えられる。

4) 切り返し

切り返しについては最も授業における頻度が高かっただけに理解・達成度も高いであろうと予測したが、結果は最も理解・達成度が低かった。中でも最も難しい（理解・達成度が低い）のは「(連続左右面を)一呼吸で打っているか (2.29 ± 0.98)」であり、これは全項目中最も高い値であった。また、「元立ちの竹刀の物打ち付近での応じ方 (2.21 ± 0.88)」や「打ち落とす感覚での応じ方 (2.2 ± 0.87)」、「左右45度で左右面を打っているか (2.2 ± 0.76)」について理解・達成度が低かった。

5) 約束稽古

約束稽古についての理解・達成度の Mean \pm SD は 1.92 ± 0.81 であった。このカテゴリーの中で最も理解・達成度が低かったのは「一呼吸で打っているか (2.18 ± 0.9)」であり、ここでも剣道における呼吸法の難しさが示唆された。

6) 互格稽古

互格稽古についての理解・達成度の Mean \pm SD は 2.06 ± 0.79 であった。本授業における互格稽古の位置づけは竹刀を用いての剣道の基本的内容の総まとめとしての意味合いを持たせている。したがって密度の濃い内容になり、かつ難しくなるであろうと考えた。結果は「切り返し」の次に難易度が高かった（理解・達成度が低かった）。このカテゴリーの中では「切り返し・約束稽古で得た姿勢でできるか (2.22 ± 0.77)」の項目が最も高く、順に「切り返し・約束稽古で得た構えでできるか (2.07 ± 0.76)」、「切り返し・約束稽古で得たわざが使えるか (2.05 ± 0.81)」であり、どの項目も切り返し・約束稽古における難易度の高さを示唆している。

7) 剣道形 (1~3本目)

剣道形についての理解・達成度の Mean \pm SD

は 1.7 ± 0.69 であった。最も理解・達成度が低かったのは「3本目の動作の理解 (2.23 ± 0.9)」、次に「形を打つときの呼吸法の意識 (2.07 ± 0.86)」であり、剣道形においても切り返し・約束稽古同様剣道における呼吸法の難しさが示唆された。また、剣道形10本中(太刀形7本, 小太刀3本)1~3本目は初学の形として実際に初段の審査等で取り扱われているが、3本目の内容「入れ突きに委やす」「位詰」の動作は初心者には非常に難しいことがわかる。

剣道形の指導について高野は以下のように述べ、定義付けている。

「剣道の形は剣道の技術中最も基本的なるものを選びて組み立てたるものにして、之によりて姿勢を正確にし、眼を明かにし、技癖を去り、太刀筋を正しくし、動作を機敏軽捷にし、間合を知り、氣位を高め、氣合いを錬る等甚だ重要なものなり。初めより道具を着け互格の試合を試み勝負を争う時は姿勢・動作を亂し氣合間合を測らず刺撃も正確ならずして多く悪癖を生じ上達亦遅し。故に昔は必ず先づ形より入りて試合に到るを順序となせり。故に基本動作に習熟するに至れば適宜に形を交へて教授するを可とす。」⁹⁾

しかし本授業においては、その精神を生かしながらも、現代剣道は竹刀稽古中心であることやカリキュラム上の時間の問題などから、竹刀稽古の総括としてまた基本を見つめ直すという意味合いを持たせ定義付けた。その結果、「作法・礼法」を除く技能のカテゴリーでは最も理解・達成度が高いものとなったと考えられる。[「1本目の内容の理解 (1.37 ± 0.55)」、 「中段の構えの理解 (1.38 ± 0.53)」、 「2本目の内容の理解 (1.4 ± 0.6)」、 「構えをといた状態の理解 (1.4 ± 0.54)」等]

3. 剣道経験の有無からみた授業内容(質問項目)についての検討

本授業内容の理解・達成度の度合いについて表3の結果と本授業をおこなった剣道指導者の眼(評価)から、Mean値2.00以上をもって理解・達成度が低い(内容が難解な)項目と定義付けた。

表4 理解・達成度の低い項目と剣道経験の有無との関連

n=87 *P<0.05 **P<0.01

カテゴリー	授業内容の質問項目	尺度	経験者 n=34		未経験者 n=53		χ ² 値
			度数(人)	%	度数(人)	%	
基本動作	振り下ろし最下点(打突の終末)と足の引きつけが一致していますか	1	21	24.1	4	4.6	35.25**
		2	12	13.8	24	27.6	
		3	1	1.1	24	27.6	
		4	0	0	1	1.1	
	語尾の発音を強調していますか	1	22	25.3	9	10.3	23.37**
		2	8	9.2	16	18.4	
		3	4	4.6	24	27.6	
		4	0	0	4	4.6	
打突(胴打ち)	打ったときに両肘がしっかり伸びていますか	1	14	16.1	7	8	11.79**
		2	16	18.4	26	29.9	
		3	4	4.6	20	23	
		4	0	0	0	0	
切り返し	振りかぶった時、両拳は頭上まであがっていますか	1	18	20.7	5	5.7	22.39**
		2	13	14.9	28	32.2	
		3	3	3.4	19	21.8	
		4	0	0	1	1.1	
	左拳は正中線から外れていませんか	1	18	20.7	3	3.4	32.8**
		2	15	17.2	25	28.7	
		3	1	1.1	22	25.3	
		4	0	0	3	3.4	
	一呼吸で打てていますか	1	18	20.7	3	3.4	28.57**
		2	11	12.6	20	23	
		3	4	4.6	20	23	
		4	1	1.1	10	11.5	
	左右45度で打てていますか	1	14	16.1	3	3.4	25.82**
		2	17	19.5	21	24.1	
		3	3	3.4	27	31	
		4	0	0	2	2.3	
	竹刀の物打ち付近で応じる元立ちができていますか	1	16	18.4	6	6.9	18.25**
		2	12	13.8	17	19.5	
		3	5	5.7	27	31	
		4	1	1.1	3	3.4	
	元立ちとして、打ってくる竹刀を打ち落とす感覚がわかりますか	1	18	20.7	4	4.6	26.38**
		2	11	12.6	19	21.8	
		3	5	5.7	26	29.9	
		4	0	0	4	4.6	
約束稽古	一呼吸で打てていますか	1	15	17.2	7	8	13.39**
		2	12	13.8	21	24.1	
		3	7	8	19	21.8	
		4	0	0	6	6.9	
互格稽古	切り返し・約束稽古で得た姿勢で出来ますか	1	16	18.4	2	2.3	26.92**
		2	12	13.8	20	23	
		3	6	6.9	31	35.6	
		4	0	0	0	0	
	切り返し・約束稽古で得た構えで出来ますか	1	18	20.7	3	3.4	31.61**
		2	13	14.9	27	31	
		3	2	2.3	23	26.4	
		4	1	1.1	0	0	
	切り返し・約束稽古で得たわざが使えますか	1	19	21.8	4	4.6	30.9**
		2	14	16.1	26	29.9	
		3	1	1.1	20	23	
		4	0	0	3	3.4	
剣道形	形を打つときの呼吸法(一呼吸)について意識できますか	1	14	16.1	13	14.9	3.58
		2	11	12.6	18	20.7	
		3	8	9.2	21	24.1	
		4	1	1.1	1	1.1	
	3本目の「入れ突きに委やす」「位詰」の動作が理解できましたか	1	14	16.1	9	10.3	8.11*
		2	9	10.3	16	18.4	
		3	11	12.6	24	27.6	
		4	0	0	4	4.6	

表5 呼吸法と剣道経験の有無との関連

n=87 **P<0.01

カテゴリー	授業内容の質問項目	尺度	経験者 n=34		未経験者 n=53		χ ² 値
			度数(人)	%	度数(人)	%	
基本動作	常に大きな声を心がけて出していますか	1	25	28.7	18	20.7	15.84**
		2	7	8	14	16.1	
		3	2	2.3	19	21.8	
		4	0	0	2	2.3	
	語尾の発音を強調していますか	1	22	25.3	9	10.3	23.37**
		2	8	9.2	16	18.4	
		3	4	4.6	24	27.6	
		4	0	0	4	4.6	
	打つ前に十分声を出して(志気を高めて)打っていますか	1	25	28.7	11	12.6	23.92**
		2	5	5.7	23	26.4	
		3	4	4.6	18	20.7	
		4	0	0	1	1.1	
切り返し	一呼吸で打てていますか	1	18	20.7	3	3.4	28.57**
		2	11	12.6	20	23	
		3	4	4.6	20	23	
		4	1	1.1	10	11.5	
約束稽古	一呼吸で打てていますか	1	15	17.2	7	8	13.39**
		2	12	13.8	21	24.1	
		3	7	8	19	21.8	
		4	0	0	6	6.9	
剣道形	形を打つときの呼吸法(一呼吸)について意識できますか	1	14	16.1	13	14.9	3.58
		2	11	12.6	18	20.7	
		3	8	9.2	21	24.1	
		4	1	1.1	1	1.1	
	相手と呼吸を合わせることを意識していますか	1	15	17.2	14	16.1	4.88
		2	13	14.9	29	33.3	
		3	5	5.7	10	11.5	
		4	1	1.1	0	0	

表4は、授業内容についてその理解・達成度の低かった項目における剣道経験者と未経験者との関連をみたものである。理解・達成度の低かった各集計項目(15項目)が「剣道経験の有無」に何らかの関連性があるかどうかをみたところ、有意水準1%において、「振り下ろし最下点(打突の終末)と足の引きつけが一致していますか」「語尾の発音を強調していますか」「打ったときに両肘がしっかり伸びていますか」「振りかぶった時、両拳は頭上まであがっていますか」「左拳は正中線から外れていませんか」「一呼吸で打てていますか(切り返し)」「左右45度で打てていますか」「竹刀の物打ち付近で応じる元立ちができていますか」「元立ちとして、打ってくる竹刀を打ち落とす感覚がわかりますか」「一呼吸で打てていますか(約束稽古)」「切り返し・約束稽古で得た姿勢で出来ますか」「切り返し・約束稽古で得た構えで出来ますか」「切り返し・約束稽古で得たわざ

が使えますか」の12項目、有意水準5%では、「3本目の【入れ突きに萎やす】【位詰】の動作が理解できましたか」の1項目において関連性が認められ、剣道経験者と未経験者とは、その内容の理解・達成度に何らかの差があると考えられるが、「形を打つときの呼吸法(一呼吸)について意識できますか(χ²値 3.58, df=3, 有意差なし)」については関連性が認められなかった(2つの項目は独立している)。

次に各カテゴリー別にみた結果(表3)を参照して剣道の呼吸法に関する項目について理解・達成が難解であるとの見解から、呼吸法(発声も含む)に関する項目と剣道経験の有無とをクロス集計した結果を表5に示した。「常に大きな声を心がけて出していますか」「語尾の発音を強調していますか」「打つ前に十分声を出して(志気を高めて)打てていますか」「一呼吸で打てていますか(切り返し)」「一呼吸で打てていますか(約束稽古)」

の5項目において1%水準で経験者と未経験者では有意に差があることが認められたが、カテゴリー「剣道形」の「形を打つときの呼吸法（一呼吸）」について意識できますか（ χ^2 値 3.58, $df=3$, 有意差なし）「相手と呼吸を合わせることを意識していますか（ χ^2 値 4.88, $df=3$, 有意差なし）」の2項目については関連性が認められなかった（2つの項目は独立している）。

授業内容の理解・達成度について、授業内容を大きく「竹刀でおこなう内容」つまり竹刀剣道と「形」つまり剣道形に分けると、竹刀剣道の内容については経験者の理解・達成度と未経験者の理解・達成度に違いがみられたが、剣道形の特に呼吸に関する項目については経験の有無に理解・達成度の違いはみられなかった（両者ともに低かった）。剣道形が1～3本目の初学の内容であるにもかかわらず、形に対する理解・達成意識が経験者も未経験者同様に低かったのは、経験者の中の段位が初段から三段まで、平均修行年数 9.52 ± 3.5 年であることや現代の剣道の修練が竹刀稽古中心であることの背景から生じたものと考えられる。また、逆をいえば、剣道形の内容というのは「攻防の理合」であることから10年程度の修行では身につかないという剣道の奥深さの現れなのかもしれない。

「剣道形」の取り扱いについて⁹⁾、高野が述べているように『基本動作に習熟した後の切り返しや約束稽古に移行する中で適宜に形の内容を入れていき、剣道における攻防の理合を理解させ、互格稽古に最終的にそれを生かす。』というこれからの授業展開の工夫の余地があることが示唆された。限られた期間、少ない時間数の中で剣道を正しく伝承していくためには、「竹刀剣道」と「剣道形」のバランスを考慮・正しく把握し、様々な対象・レベル・目的等を事前に調査し、それらに応じた授業展開モデルを数パターン作成することが望ましいのではないかと今回の調査結果を通じて思った次第である。

V. まとめ

平成10年度の剣道授業について自己反省、そし

て今後の展望も含めた意味での本研究において以下に示す知見を得た。

1. 本授業は、課程別では体育・スポーツ課程（51名, 58.6%）、武道課程（36名, 41.4%）の両課程からあまり偏りなく履修されているが、武道課程においては剣道専攻の学生が全体の31%（27名）を占めていた。また、授業履修者の剣道経験の有無による構成は経験者34名（39.1%）未経験者53名（60.9%）であった。
2. 本授業内容に対する理解・達成度の履修者全体の平均値 $Mean \pm SD$ は 1.8 ± 0.74 であり、実際に指導した見地から、「達成度としては自信がないが、理解はしている」というレベルのものとして評価した。また、本授業内容を7つのカテゴリーに分類してそれぞれの $Mean \pm SD$ から、最も理解・達成度の高かったのが「作法・礼法（ 1.36 ± 0.58 ）」であり、最も低かったのが「切り返し（ 2.08 ± 0.83 ）」であった。さらに各項目別にみると切り返しにおける呼吸法（ 2.29 ± 0.98 ）をはじめ剣道の呼吸法の難しさが示唆された。
3. 本授業内容に対する理解・達成度を剣道経験者群と未経験者群とに分け、理解・達成度の低い内容についての関係をみるとほとんどの項目に関して経験の有無に有意な差が認められたが、「剣道形」の呼吸に関する2項目については、経験の有無に有意な差は認められなかった（ χ^2 値 3.58, $df=3$, 有意差なし, χ^2 値 4.88, $df=3$, 有意差なし）。

本研究では、初心者を中心とした剣道授業内容の理解について、その実態をある程度知ることができた。剣道の基本的内容である切り返しの指導についてウエイトを置き最も密度を高くしたが、剣道未経験の学生の理解度が低かった。また、剣道形について今後一考の余地があり、形を指導する時間、指導のタイミング（この場合指導計画の順序）等を考慮することで、より剣道の本質に迫る授業ができると確信した。しかし、今回の研究では全体のサンプル数が少なく、先行研究も十分になかったことから萌芽的研究であり不十分な点も多々あるが、質問項目等の再検討の妥当性も含

めて改善しながらこれからも継続していきたいと
考え、本研究の結びとしたい。

文 献

- 1) 鹿屋体育大学, 自己点検・評価(現状と課題及び外部評価, 平成9年度), 鹿屋体育大学(学内出版物), p1, 1998.
- 2) 合志徳久, 多様化する学生に対する解剖生理学教科書の開発と同教授法の研究, 鹿屋体育大学学術研究紀要第20号, p41, 1998.
- 3) 鹿屋体育大学, 体育学部履修要項, p189, 1998.
- 4) 高野佐三郎, 剣道(大正4年刊), 島津書房, 1915.
- 5) 全日本剣道連盟, 幼少年剣道指導要領「改訂版」, 1986.
- 6) 重岡昇監修/剣道日本編集, 全解日本剣道形, スキージャーナル, 1982.
- 7) 全日本剣道連盟, 剣道講習会資料, 全日本剣道連盟, 1998.
- 8) 前阪茂樹, 剣道の切り返しについての一考察 近代～現代の切り返しの内容に関する資料より, 鹿屋体育大学学術研究紀要第19号, pp93～101, 1998.
- 9) 高野佐三郎, 剣道(大正4年刊), 島津書房, p68, 1915.

(平成11年2月2日 受付)
(平成11年2月18日 受理)